

安心の地域
医療を支える



ジェイコー JCHO × ニュース

Japan Community Health care Organization

2021 SUMMER 夏号 | ジェイコーニュース | vol.30

独立行政法人地域医療機能推進機構

CONTENTS

p.02 ニュース
JCHO仙台病院が移転・開院しました

p.03 新任理事のご挨拶
新任院長メッセージ

p.04 **【特別企画】**
JCHO東京蒲田医療センターへの
医療従事者派遣について

p.09 **【トピックス】**
オレンジステーション開設
プロジェクト‘三つのオレンジへの恋’始動
東京新宿メディカルセンター 看護部長 野月 千春

p.10 **【特集】** JCHO病院における業務改善への取り組み
人吉医療センター 副院長 下川 恭弘
相模野病院 院長 今泉 弘
東京高輪病院 副栄養管理室長 鈴木 静
熊本総合病院 副栄養管理室長 白坂 亜子

p.14 **【トピックス】** 新築移転
“地域とともにどこまでも高みを目指す”
NEW JCHO仙台病院
仙台病院 総務企画課 総務企画課長(併) 医事課長 三浦 雅之

p.15 **【インフォメーション】**
第6回JCHO地域医療総合医学会の開催に向けて
一般社団法人地域医療機能推進学会 事業課 ファン 歩実

p.16 **【JCHO GROUP】** 全国病院 MAP



JCHO東京蒲田医療センター派遣 開設メンバー全員集合

特別企画
JCHO東京蒲田医療
センターへの医療従事者
派遣について

特別企画

特集

JCHO病院における
業務改善への取り組み

ジェイコー JCHO × ニュース

Japan Community Health care Organization

NEWS

- 4月30日 医療・看護研修課 JCHO研修センター（東京都新宿区）への引っ越し
- 5月12日 新任副看護部長研修（WEB）
- 5月13日 事務（部）長・看護部長会議（WEB）
- 5月28日 評価者研修（WEB）

JCHO仙台病院が移転・開院しました

JCHO 仙台病院は、仙台市青葉区から仙台市泉区に新築移転し、令和3年5月1日に開院しました。新天地でのスタートとなることから、開院にあたっては、地域の病院・周辺クリニックへの挨拶まわりを行ったほか、診療科紹介をメインとしたJCHO 仙台病院開院新聞広告を宮城県全域に44万部発刊し移転開院の周知をしました。また、フジテレビ系列、日本テレビ系列で開院前から2週間、15秒のTVCMを計47本放映し、宣伝活動にも力を入れました。

JCHO ニュース夏号では仙台病院の新築移転に関する記事を14ページに掲載しておりますので、ぜひご覧ください。

安心の地域医療を支える JCHO仙台病院 移転開院

東北地方に開かれた病院を展覧

5月6日（木）より 外来診療開始

独立行政法人 地域医療推進機構 仙台病院

新聞広告（表面）

JCHO仙台病院 専門診療科と診療医のご紹介

01 総合診療科	02 産科・婦人科	03 消化器内科
04 循環器内科	05 小児科	06 泌尿器内科
07 呼吸器内科	08 皮膚科	09 整形外科
10 眼科	11 耳鼻科	12 歯科
13 腫瘍科	14 泌尿器科	15 産科
16 ペンククリニック	17 産科	18 産科
19 産科	20 産科	21 産科
22 産科	23 産科	24 産科

新聞広告（裏面）

JCHO仙台病院 TV-CM 15秒 安心できる地域医療・ドローン篇

ドローンと昇降機を備え、実山と遊んでいく、スーパースタイン

地域の顔が見える、スーパースタイン

外観が見える、スーパースタイン

正真正正、コピーイン

告知専用イン

5/1 移転開院

5/6 外来診療開始

TVCM

新任理事のご挨拶



病院支援
担当理事
山本 修一

はじめまして、4月から病院支援担当理事を務めています。1983年千葉大学医学部卒業で、2003年から千葉大学眼科教授、2014年からは千葉大学病院長を務めました。

病院長の6年間には、続いた医療事故に端を発する大学病院のガバナンス問題、巨額の消費税補填不足、病院職員の逮捕などの不祥事、画像診断見落としによる謝罪会見など、数多くの難しい問題（事件）に遭遇しましたが、大学病院は医療界の牽引役であるとの強い自負のもと、その解決に力を尽くしてきました。また、厚労省の医師の働き方改革検討会や中医協の入院医療分科会の委員も務め、医療制度改革の議論に現場の考えを届けてきました。

JCHO 病院は地域医療を本務としており、これは各病院が地域住民の皆さんの生活そのものと深く関わっていることを意味していると思います。したがって、「医療者がやりたい医療」と「地域が求める医療」のバランスを上手にとることが重要です。そして、現場で地域住民のために汗を流す職員をしっかりと支え、仕事のしやすい環境を整える、それが「病院支援担当」の私の役目ではないかと考えています。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

新任院長メッセージ

JCHO 船橋中央病院 山口 武人

本年度、病院長に就任しました山口武人です。船橋中央病院には昨年、千葉県がんセンターから異動し、1年間副院長として医療安全を中心に病院管理に携わりました。当院には30年以上前、二次出張として勤務しておりましたので懐かしい思いです。千葉県がんセンターで管理者として病院改革に取り組んだ経験を活かし、恩返しの意味も込めて病院運営に取り組みたいですと考えております。ご指導のほど、どうぞよろしくお願ひいたします。



JCHO 若狭高浜病院 秋野 裕信

このたび若狭高浜病院の院長を拝命しました。前任地は福井大学病院で、泌尿器科医として、医療安全管理部教授として勤務していました。過疎化と高齢化が進む若狭地方ですが、地域の中核病院として周辺の医療機関、行政、大学等とともに、地域住民の健康増進、傷病の予防、診断と治療、リハビリテーション、介護と途切れることのない医療を提供して行きます。よろしくお願ひ申し上げます。



JCHO 徳山中央病院 沼 文隆

本年4月、副院長（産婦人科）から院長に就任しました沼です。当院は5疾病（がん、脳卒中、急性心筋梗塞、糖尿病、精神疾患）5事業（救急医療、災害時における医療、へき地医療、周産期医療及び小児医療）すべてに取り組んでおりますが、感染症指定医療機関としても猖獗を極める新型コロナウイルス感染症との激戦を続けております。今後も最大限の感染予防策を講じつつ、救急医療・専門医療に職員一丸となって努力してまいります。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。



JCHO 東京蒲田医療センターへの 医療従事者派遣について

令和3年2月、JCHO 東京蒲田医療センターにおいて、国からの増床要請のため、新型コロナウイルス感染症対応病棟が新たに開設されました。新型コロナウイルス感染症対応病棟での患者受入等においては、全国のJCHO 病院に医療従事者の応援を要請し、地区の垣根を超えてJCHO 職員が力を合わせて対応しました。今回はその経緯や、「第一陣」として令和3年2月22日から3月31日の期間にJCHO 東京蒲田医療センターに派遣された職員のメッセージをご紹介します。

泣く子と地頭には勝てないがJCHOの意地を見せてやる

JCHO 東京蒲田医療センター新型コロナウイルス感染症対応病棟責任者（理事長特任補佐） 内野 直樹

令和3年2月、JCHO 東京蒲田医療センター（以下「JCHO 蒲田」という。）において「新型コロナウイルス感染症対応病棟（49床）」が新たに開設されました。新型コロナウイルス感染症対応病棟での業務を遂行するにあたり、全国のJCHO 病院へ看護師等の医療従事者派遣を要請するに至った経緯を説明します。

JCHO 蒲田では、既に東京都の依頼を受け29床の専用病棟を開設していたため、新たな対応病棟開設により合計78床を提供することとなりました。78床のうち東京都からの依頼により開設した29床については、「病院が地域貢献のために」開設したのですが、新たな49床は国からの強い要請により運用を開始したもので、一般診療の縮小や救急応需の制限等をしなければならず、JCHO 蒲田の石井院長は引き受けるにあたりかなり悩まれた上決断されましたが、「受けた以上は恥ずかしくないようにやってみせる」という強い意思により実現したものです。JCHO 蒲田に引き受けていただくにあたり、本部から提示した条件は、「①現場責任者（様々なクレーム対応）として内野を派遣する、②医師・看護師など人的資源は本部が責任をもって確保する」ことであったため、全国のJCHO 病院へ医療従事者の派遣を要請することとなりました。決定を受けJCHO 蒲田では約10日間で、使用する病棟に入院中の患者40名全員を退院、転院、院内転棟等の対応を行い、新型コロナウイルス感染症対応病棟としての開棟に至りました。

新型コロナウイルス感染症に対する診療が全てに優先するとは考えていませんが、看護師等の医療従事者を派遣していただいた約30病院（令和3年5月末までに派遣いただいた病院数）は、国難ともいえる状況に貢献できることは全てやる覚悟で、独立行政法人の責務とJCHOの意地を示してくれたのだと思います。この度、貴重な人材をJCHO 蒲田に派遣していただいた病院の院長、看護部長や現場の皆様、JCHO 蒲田での業務にあたっていただいた医療従事者の皆様に心から感謝申し上げます。

今後の感染状況にもよりますが、JCHO 蒲田のような対応を行う際には現場の状況を十分勘案し、病院と協議の上、本部が全面的に支援するという、強く明確な意思表示を行うことで全病院の職員が理解し、納得できる方法を選択すべきでありますし、運用状況等の情報提供も必須であると考えています。



令和3年3月31日 第一陣終了式の写真

JCHO登別病院 看護師 小野 康子

派遣期間中、CT画像でコロナの病態を説明して頂き、知識が深まりました。また、病棟内をゾーニング^(※1)しエリア分けを実施したことも学びとなりました。自施設でも伝達を行い感染管理の実践を行っていきたいと思います。初めは不安もありましたが、派遣先のスタッフの配慮やサポートがあり、7週間頑張ることが出来ました。

JCHO仙台病院 副看護師長 松田 美紀

派遣を通し、スタッフ全員が感染対策やコロナ患者の対応について共通理解し実践することで、自身が感染しない、他者に感染させないということに繋がると改めて感じました。また、全国からJCHO職員が集まり、情報交換できたことで、より多くの知識を得ることができました。この得た知識を今後活かしていきたいです。

JCHO仙台病院 看護師 関根 紗佳

JCHO東京蒲田医療センターでは、感染対策を徹底すると同時にゾーニング^(※1)を工夫し、コロナ患者の隔離による負担を軽減する環境作りがされていて、患者に寄り添った看護を振り返る機会となりました。派遣を通して新たな発見があったり、看護師として自身のスキルアップに繋がる体験ができました。

JCHO仙台南病院 看護師 水戸部 慧

派遣された当初は不安がありましたが、派遣されてきた皆さんがとても親切で、仕事熱心だったので、助け合いながら働くことができました。終わった時には「もう少し働きたい」と思えるほどでした。この大変な状況で、全国各地から一か所に集まって看護ができたのはとても貴重な体験だと思います。徹底した感染対策など学んだことを自施設でも活かしていきたいと思いました。

JCHO仙台南病院 看護師 神 朱那

JCHO東京蒲田医療センターでは、海外の方、海外渡航歴のある方など患者層が幅広く、感染予防対策も多岐にわたりました。マニュアル外の事例も多くありましたが、スタッフ間でその都度話し合い、対策を検討しました。自施設では今回の経験を生かしつつ、新たな感染対策知識を習得しながら対応にあたりたいと思います。

JCHO秋田病院 看護師 佐藤 孝哉

今回の派遣は、感染委員として4年間学んだ知識と経験をさらに高める機会となりました。感染管理の最前線を実際に体験することで、自施設に戻ってからはより感染予防を念頭に置いた看護ができています。不安もありましたが、同じく派遣された方々やJCHO東京蒲田医療センターの方々の協力でやり遂げることができたと思います。

JCHO秋田病院 看護師 阿部 聖也

コロナ病棟を新しく開設するにあたり、ゾーニング^(※1)、物品の準備や整理など様々なことを行いました。また、COVID-19の病態、経過、治療などの一連の経過を多く見ることができて勉強になりました。とても貴重な経験が出来ました。

JCHO二本松病院 副看護師長 黒澤 チエ

派遣中は本部の方のサポート体制が万全で、看護師長さん達が丁寧に指導していただき、安心して仕事に臨むことができました。血糖が高い患者さんが多く、糖尿病看護認定看護師として、改めて日々の血糖コントロールの重要性を実感しました。この経験を基に血糖管理が感染予防につながることを患者さんに伝えていきます。

JCHO群馬中央病院 看護師 深澤 隼人

北は北海道、本州はもちろん四国、九州から集い、方言も様々。初対面ではあるが皆コミュニケーションスキルに長けており、報告、連絡、相談がスムーズにできました。最初は不安もありましたが、全国から集まった仲間と協力し合い、無事に務めを果たすことができました。

JCHO群馬中央病院 看護師 小林 寿夫

感染対策として、標準予防策を遵守し、適切な個人防護具の使用や、環境衛生の保持などについて実践を通じ、理解を深めることができました。また、COVID-19重症患者の救急搬送を経験し、適切なタイミングで高度医療機関と連携を図ることの大切さを学びました。これらの経験を今後の看護に活かしたいです。

※1 ゾーニング…区分すること。この場合、病原体によって汚染されている区域(汚染区域)と、汚染されていない区域(清潔区域)を区分することを指す。

JCHO横浜保土ヶ谷中央病院

副看護部長 先崎 晴美

派遣された看護師達は、スキルも経験も様々です。今回、ゼロから病棟を作り上げていくことに、とても高いチーム力がありました。一人ひとりが自分のできることを積極的に責任もって実践し、そしてインシデントが生じないように、コミュニケーションが良好で、まさしく一丸となった日々でした。貴重な経験に感謝いたします。

JCHO湯河原病院 リウマチ科医長 八木 喬

短い期間でしたが、多くの事を学ぶ機会を頂き感謝しております。湯河原町では幸いにも今のところ大きな感染拡大はみられておりませんが、引き続きJCHO東京蒲田医療センターでの経験を活かして対応していきたいと思います。

JCHO湯河原病院 副看護師長 平井 沙知

不安の中参加しましたが、各々が得意分野を活かし協力しながら、良い環境の中で病棟運営が行えたと感じています。自施設でコロナ患者と関わることはありませんが、貴重な経験を院内で報告し、共有することができました。今回の派遣を通して、テレビで見ていることが現実であることを、身をもって学ぶことができました。

JCHO湯河原病院 看護師 石田 絢子

JCHO東京蒲田医療センターでは、清掃作業やPPE^(※2)指導を徹底して感染予防を行い、平時からの感染予防意識が重要であると再確認することができました。自院でも取り入れていくことでさらなる感染予防ができると感じ、病院全体に報告会を実施し、参加者より質問もあり感染予防意識へ働きかけることができました。

JCHO高岡ふしき病院 看護師 坂田 裕美

コロナ病棟新設のための派遣に参加し、色々経験の違う看護師と同じ目標に向かい業務を行う緊張と責任の重さを感じ良い経験になったと思います。自己の予防・体調管理、JCHO東京蒲田医療センターのルール、ゾーニング^(※1)に応じた感染予防対策を十分にいき専門職として責任ある行動をする大切さも学びました。この経験をこれからの看護に活かせるよう努めたいと思います。

JCHO高岡ふしき病院 副看護師長 水門 由紀子

派遣が決まった当初は緊張感もありましたが、実際に蔓延している東京の現場ではどのように対処されているか知りたいという気持ちで臨ませていただきました。2週間という短い期間でしたが、コロナ病棟でのPPE^(※2)や患者対応など基本を学ぶことができ今後自院での対応に活かしていきたいと思います。ありがとうございました。

JCHO中京病院（令和3年4月より東京山手メディカルセンター所属） 看護師 毛利 瑛

病棟経験がなくとても不安でしたが、共に働く方々と同じゴールに向かって協力できました。特殊な環境下で互いに相談し、助け合うことでより良い看護ができ、改めてチーム医療の大切さを学びました。自院に戻った今も、良質な医療を提供する為に職種関係なく連携がとれるよう意識して行動出来ていると感じています。

JCHO滋賀病院 看護師 石川 樹

JCHO東京蒲田医療センターで2月下旬よりコロナ病棟の応援スタッフとして参加させていただきました。同センターは、コロナ患者を受け入れて1年という豊富な経験を有しており、感染を広げないためのゾーニング^(※1)や防護体制をどのように徹底すればよいのが貴重な知識を学ぶことができました。

JCHO星ヶ丘医療センター 理学療法士 北川 拳士

今回、理学療法士として派遣させて頂き、約4週間の派遣期間の中で4症例ほどPT介入^(※3)させて頂いた事はとても良い経験だと思っています。JCHO東京蒲田医療センターのリハビリ部・看護部の方々や他県の看護師さんとの交流も良い経験の一つです。また尾身理事長とゲーテッチのツーショットを撮れた事は、とても記念になりました。

JCHO大和郡山病院 看護師 出口 友絵

派遣中は院長や師長さん方の手厚いサポートがあり、とても充実した1か月を過ごさせていただきました。全国で頑張っているJCHOのみなさんと出会い、意見を出し合いながら協働し、様々な視点や知識を学び、かけがえのない貴重な経験をさせていただきました。尾身理事長が視察に来られた際、激励してもらえたのはいい思い出です。

※2 PPE…個人用防護具(ガウン、マスク、キャップ、シューカバー、ゴーグルなど)のこと。

※3 PT介入…理学療法的介入

JCHO玉造病院 看護師 吉川 潤奈

自院ではコロナ病棟がまだ稼働していないため、対応方法を学んでも実感が湧いていませんでした。実際のコロナ病棟での経験をしたことで、自院のマニュアルを具体的に作成出来ました。稼働した時にはスタッフへ学んだ事を周知し、率先して看護を提供していきたいと思います。

JCHO玉造病院 看護師 濱中 美希

コロナ病棟勤務の経験がないため最初はとても不安でしたが、徹底された感染対策を実施しており安心して働くことができました。玉造病院のコロナ病棟は準備段階であるため、受け入れ開始した際には今回の経験を活かし、スタッフへの指導を行いたいです。

JCHOりつりん病院 看護師 丸山 彰一

派遣看護師として、同じ思いを共有できる仲間と出会え、助けをもらいながら働き終えることができました。まずは新しい環境に適応すること、本部担当者の心理的なサポート、看護師長の適切なアドバイス、仲間と情報共有することで、期間限定の仕事を円滑に行うことができました。貴重な経験をありがとうございました。

JCHO宇和島病院 副看護師長 西川 洋子

初めてコロナ患者を看るということで、不安もありましたが、発症状況や入院までの流れ、治療や感染予防のための取り組みなど、多くの事を学ぶことができました。また全国から集まったメンバーと一緒に楽しく働くことができ、貴重な体験をさせて頂きました。今回の派遣で学んだ事を自病院でも活かしていきたいです。

JCHO九州病院 副看護師長 平石 絵里子

COVID-19の患者を受け入れるための病棟内の整備やマニュアル作成から稼働までを経験しました。当初はCOVID-19の知識もなく不安でしたが、全国から派遣された看護師同士で様々な場面に対応していく中で一体感が生まれ、一つの病棟になったと実感しました。また、皆の前向きな姿勢に励まされ、使命感を持って働くことができました。

JCHO久留米総合病院 看護師 安丸 苑果

1か月半という短い派遣期間の中でコロナ病棟の設営から、患者の受け入れを行いました。先ほどまで元気だったのに数時間で重症化してしまう症例を経験しコロナの怖さを実感して、本当の意味での感染防止の大切さを学ぶことができました。また、一緒に働きたいと思える方々と出会い、貴重な経験をすることができました。

JCHO佐賀中部病院 看護師 深川 佳奈子

JCHO東京蒲田医療センターコロナ病棟へ1か月間派遣看護師として携わりました。コロナ病棟立ち上げから関わる事ができたことで貴重な経験を得ることが出来ました。また、各地域のJCHOグループの看護師の皆さんと仕事をさせて頂き、改めて人と人との出会いと繋がりの大切さを感じた有意義な期間でした。

JCHO熊本総合病院 看護師 藤川 佐祐里

JCHO熊本総合病院新型コロナウイルス感染症病棟で勤務しています。当院での感染対策をJCHO東京蒲田医療センターで活かすことができると考え参加しました。各JCHO病院から集まった看護師と協力して患者に対応できたことは、人生の財産となりました。

JCHO熊本総合病院 看護師 森下 美歩

新型コロナウイルス感染症病棟新設にあたり、2月後半から約3か月間、JCHO東京蒲田医療センターで勤務しました。新型コロナウイルス対応経験者を中心に意見を出し合い、新しい病棟を作り上げていくという過程は大変さと同時に大きなやりがいを感じました。全国に友達ができ、とても充実した3か月でした。



初日オリエンテーション

今回のミッションは、当院で軽症・中等症の COVID-19 患者を引き受けることでしたが、重症化して ICU のある病院へ転送する事態が起きました。

4 月に入ると都内でも変異株が増えて中等症患者の割合が増え、重症化の予防が必要になったため、胸部単純 X-P で異常を疑う、または発熱が続く場合には積極的に胸部 CT を撮って明らかな肺炎像があり、CRP が 5.0mg /dL 以上の場合にはレムデシビルとデキサメタゾンの併用を開始しました。解熱しない場合や室内気で血中酸素濃度が 90% 低下になると、ステロイドパルスまたはハーフパルス治療に切り替えています。期間中に 80 人を受け付けていますが、重症化を抑制できて高次機能病院への転送がなくなりました。

今回、COVID-19 専用病棟に転用した病棟は、地下にある CT 室までの動線も悪く、設備も乏しいために常に二重に P P E を着用して働く医療従事者には過酷な環境です。この場を借りて精勤してくださった医療従事者の方々と派遣元病院長に深謝申し上げます。

(JCHO 東京蒲田医療センター 院長 石井 耕司)



レッドゾーン対応の外回り



ME (臨床工学技士) からのハイフロー、呼吸器レクチャー

JCHO 東京新宿メディカルセンター 看護部長 野月 千春

わが国の認知症高齢者数は2025年には約700万人、65歳以上の高齢者の約5人に1人に達することが見込まれており、高齢者の4人に1人は認知症又はその予備群とされています。当院における1日の外来患者数は約900人であり、うち約6割が65歳以上の高齢者です。何らかの疾患を抱え来院した高齢者の「受診日や検査日の間違い」等から発展したクレーム報告が散見されてきましたが、その多くは認知症あるいは認知機能の低下と考えられる方によるものでした。

認知症に限らず初めて病院を訪れる方はいろいろな不安を抱えているうえに、さらにわかりにくい病院の中で孤立感を深めている可能性が高く、このような方々への対応は患者サービスの一環として取り組む必要があると考えます。認知症患者の大部分は「認知症の治療のため」に受診するのではなく、それぞれが抱える問題のため様々な診療科を受診し、医師・看護師のみならず薬剤、検査、放射線、リハビリ、栄養など各職種の担当する部門を訪れるのですから、全ての病院職員が対応の術（すべ）を知っていなければなりません。そこで私たちは‘オレンジチーム’（病院の事業としての委員会）を立ち上げ、具体的なツールとして、「オレンジステーション」「オレンジファイル」そして「オレンジリング（サポーター）」の‘三つ



外来患者さんへのオレンジファイルの説明
(写真は関根院長と野月看護部長)

のオレンジ’を活用した対応を考えました。

オレンジチームの源流は厚生労働省の新オレンジプランであり、‘オレンジ’は認知症対策のシンボルカラーです。‘三つのオレンジ’はこのプロジェクトを支える三つの視点、すなわち「オレンジステーション」は患者さんが必要な時にいつでも立ち寄れる場、「オレンジファイル」は患者さんからの立場の表明、「オレンジリング」はサポートする医療者の姿勢を示します。

ちなみに、私たちのプロジェクト名は、ロシアの作曲家プロコフィエフのオペラ『三つのオレンジへの恋』（原作はイタリアの劇作家カルロ・ゴツィ）になぞらえたものです。このオペラでは、うつ病でふさぎ込む王子が魔女の転ぶ姿を見て思わず笑ってしまうのですが、それに怒った魔女は腹いせに「三つのオレンジに恋をする」という呪いを王子にかけてしまいます。王子は数々の危険を冒して三つのオレンジ（実はそれぞれに王女が入っている）を手に入れ、最後には三つ目のオレンジから出てきた王女と結ばれるという寓話劇です。本格的な活動はこれからになりますが、私たちが提供する‘三つのオレンジ’によって、認知症や受診に不安を抱える方々が笑顔を取り戻し、病院職員に見守られながら安心して病院内を移動（行動）できるようにと願っています。



オレンジステーションと担当看護師（オレンジスタッフ）、
名札にオレンジリングをつけています。

SDGs 達成に向けての JCHO の貢献



みなさんは右図のカラフルなマークを目にしたことはありませんか？これはSDGs（エス・ディー・ジーズ：Sustainable Development Goals「持続可能な開発目標」）のシンボルで、「2030年までにだれ一人取り残されない世界を作ろう」と国連が主導している活動です。さもなくばこのままでは貧富の差や様々な格差がどんどん広がり人々が安心して暮らし続けていくことが不可能になってしまうという現状認識から出発しています。そのため、あらゆる組織やすべての人々が、17のSDGsの目標に貢献するために自主的に行動することが望まれています。

そうしてみると JCHO 東京新宿メディカルセンターの‘三つのオレンジへの恋’活動はSDGs活動そのものといえるでしょう。高齢社会ではだれもが認知症と向き合うこととなります。認知症フレンドリーな病院作り、そしてそこから地元を巻き込んで認知症フレンドリーな地域づくりを目指している JCHO 東京新宿メディカルセンターの取り組みは JCHO のSDGsの好事例なのです。

(広報・コミュニケーション担当理事 徳岡 晃一郎)

JCHOの病院では地域医療に貢献するため、また、患者さんからのご要望に応えるために、日々、業務改善に向けた取り組みを行っています。

今回、成果を挙げた施設の取り組みの一例をご紹介します。これを機会に、今回紹介した施設に興味をお持ちいただけますと幸いです。

当院の救急医療体制

JCHO 人吉医療センター 副院長 下川 恭弘

JCHO 人吉医療センターは熊本県の南部にある病床数 252 床の中規模病院です。九州山地の盆地の中にあり、山を境に宮崎県えびの市、鹿児島県伊佐市と隣接しています。この南九州3県にまたがる広大な辺境地域には十数万人が暮らしており、急性期医療需要は高いのですが、いずれも県庁所在地の大きな病院までかなりの距離があります。この地域で一番大きな病院である当院の使命として、がんや救急などの急性期医療はこの地域内で完結できるように取り組んでいます。当院は2005年に地域医療支援病院となり、この地域の医療機関との連携および機能分化を進めてきましたが、これは救急医療に関しても機能しています。令和元年度の救急外来患者数は7475名、救急車受け入れ台数2686台、平均在院日数は10.1日でした。

救急外来は各診療科の医師（救急外来担当医）1名と初期研修医1名が担当しています。救急専門医はいませんが救急認定看護師が専従しています。救急外来は研修医の研修の場でもあり、研修医が担当医とともに初期診療を行い、必要に応じて専門医にコンサルトします。研修医は2年間で1000例以上の救急症例を経験できるので、これが当院を研修先を選ぶ要素の一つとなっているようです。

専門医不在の疾患や専門が明確でない疾患はおもに総合診療科が受けています。状況によっては専門にこだわらず、肺炎を呼吸器内科以外の内科系診療科が受けたり、消化管出血を外科が受けたりしています。心臓外科手術、切断四肢再接合術、広範囲熱傷は当院では専門医がいないので対応できませんが、一旦は受け入れて熊本市などの医療機関へ転院搬送しています。陸路による搬送時間

は90分以上かかりますが、ヘリコプターでは約20分です。当院にはヘリポートが設置してあり、災害時のステージングケアユニットのような役割を平時の救急医療において担っているのではないかと思います。

高齢化により急性期治療を終えても自宅退院できないケースが増えていますが、各病棟に配属された医療福祉連携室の医療ソーシャルワーカーが遅滞なく転院調整を行って亜急性期治療に繋いでいます。社会的入院を減らして病床に余裕を持たせ、満床により救急患者を断ることが無いようにしています。

昨年来の新型コロナウイルス感染症の影響で現在は休止していますが、教育活動として院内外の医療関係者を対象に救急疾患に関する勉強会、外傷初期診療勉強会などを定期的に開いています。また、救急関連の研修コースをこの地域で受講してもらうために、これまでAHA・BLSコース、PALSコース（小児の救命処置）、INARS（心停止回避コース）、ファーストエイド（看護師対象の急変時対応コース）、KEMAT（救急初期対応におけるアンダートリアージを減らすためのトレーニングコース）を当院で開催してきました。

今後は人口減少と高齢化、新専門医制度、医師の働き方改革などで医療環境も変わっていくでしょうが、これからも地域と連携して必要な医療を考えていきたいと思っています。

JCHO 相模野病院 院長 今泉 弘

JCHO 相模野病院は、神奈川県相模原市に位置している 212 床の中規模病院です。相模原市は人口 72 万人の政令指定都市で、65 歳以上の割合である老年人口率は 26% です。市内には大学病院をはじめとしたいわゆる大規模病院が 3 つ、そのほかにも多くの小・中規模病院が存在します。

このような医療環境の中で、当院も超高齢社会における地域住民の多様なニーズに応え、地域住民の生活を支える使命を果たさなければなりません。そのためには近隣の医療機関から信頼され、安心して紹介される病院である必要があります。つまり、地域連携のさらなる強化が必須です。

地域連携強化のためにはいくつかの対策が考えられます。パンフレット作製、ホームページの改良、メディア掲載、勉強会開催、直接訪問などですが、これらには時間と経費が必要です。すぐにも実施可能で最も安価な方策は、紹介状に対する丁寧な報告書と逆紹介の推進です。そのために 2020 年度には次の二つの方策を実施しました。①医局会や部長会で紹介・逆紹介の重要性を説明し、協力を得る。②総合患者支援センターで、予定入院患者に対する説明の際にかかりつけ医を調査し、主治医と情報共有する。例えば、胆石症で入院した患者さんが退院する際に、高血圧症で通院していたクリニック（総合患者支援セン

ターで入手した情報）に当院での入院経過を報告するようにしました。近医の眼科クリニックに通院している高齢者の方が肺炎で当院に入院された場合でも退院時にその経過を眼科クリニックへ報告するようにしました。診療部の先生方や、総合患者支援センターの努力の結果、2019 年度の当院の紹介率 57.5%・逆紹介率 40.5%であったところ、2020 年度には紹介率 67.5%・逆紹介率 57.8%（前年比 + 10% / 17.3%）まで増加しました。しかし、この数値は決して満足できるものではありません。また、この増加率は我々の努力ばかりが要因ではなく、新型コロナウイルス感染症による初診患者数の減少などが大きく影響していると分析しています。

地域医療構想や働き方改革など、病院がかかえている問題は山積しています。またコロナ禍あるいは with コロナの中、患者の受診控えや健診者の減少などが予想され病院経営的にはますます困難な時代となります。さらなる紹介率・逆紹介率向上を病院の目標に掲げ、今後も上述の取り組みに加えパンフレット作製、ホームページの改良、メディア掲載、勉強会開催、直接訪問なども行い、職員全員で地域連携強化に取り組んでいきたいと考えております。



病院全景



病院外観（航空写真）



顔の見える医療連携の会（2019 年度開催）

業務改善への取り組み～病院食～

JCHO 東京高輪病院 栄養管理室 副栄養管理室長 鈴木 静

当院栄養管理室の給食業務は平成 28 年に直営から委託へ移行しました。直営の時に美味しいと言われていた献立を委託へ引き継いで始めましたが、価格や人員など諸事情により内容の変更がありました。そこに患者さん側の視点はあまりありませんでした。

その結果、徐々にではありますが、病院食の献立と味ともに評価は下がっていきました。給食業務は全面委託であり、適切な病院給食が提供できているかを管理・監督するのは病院側です。どうしたら再び美味しいと言われる食事になるか、献立や味付け、盛りつけなどを中心に病院側と委託側の栄養士が協同して改善に取り組んでいきました。

取り組みの一つとして、委託側の栄養士とともにミールラウンドを行い、昼食時に患者さんの食べる様子を見たり、感想を伺いました。また、新しい献立や患者さんの要望に応じて改良した献立などの喫食状況を意識的に確認しました。他にも残食が多かった場合にその理由を考え次の調理に反映していきました。さらにミールラウンドを行う事で気づく事が多くあり、担当者によって味付けや切り方、固さなどにばらつきが見られたため、共通認識の統一を徹底することになりました。委託業者との定例会で議題にあげ、病院側と委託側との認識

を統一し厨房内に伝達することで全体の共通認識とすることができました。また、委託側の栄養士が病棟へ行く事で患者さんを身近に感じることができ、どのような患者さんがどのように食べているかを理解することができました。その上でサイクル献立の見直しを行い、一年で 10 回の行事食は季節を感じられるよう調理や盛り付けに工夫を凝らしています。

その後患者さんからは、美味しいという声をいただくようになり、前年度と比べると評価は上がりました。

給食業務において委託業者は、既存献立の変更や新しい献立の提案や食材や加工食品の選定などを行います。そして病院側がそれぞれ確認を行います。最近では新しい献立の試作や意見交換など積極的な提案が見られるようになりました。献立作成は食材料費や委託契約などの制限があります。その中で患者さんに満足していただける食事を提供していくために、今回取り組んできたミールラウンドなどを継続していきたいと思います。また患者さんの声を聴き委託業者との定例会や意見交換の場を通して、それらを反映し、より良い食事を提供していけるよう継続して取り組んでいきたいと思っています。



ソフト食のおせち料理盛り合わせ



お正月の献立



クリスマスの献立



秋分の日献立

JCHO 熊本総合病院 栄養管理室 副栄養管理室長 白坂 亜子

食事は入院生活における楽しみの一つです。管理栄養士には、治療効果があり、美味しい食事を提供したいという思いがありますが、それを実現するには調理師との連携が重要です。

病院給食業務は全国的に委託業者が7割以上介入しています。当院は職員の調理師、任期付職員の調理員10名の退職があり、平成26年度から3年間X委託業者に人材と材料購入の一部委託を行いました。また、平成28年の熊本地震以降人手不足でX委託業者は撤退し、直営給食に戻りました。現在は、職員調理師3名（うち一人病欠）、任期付職員3名、時間制職員17名（2～6時間勤務、20～70歳代）、人材派遣3名の計26名（調理師有資格者は10名）の調理員と7名の管理栄養士で約320食/回を調理から食器洗浄まで一丸となって頑張っています。

「この病院のお米は本当に美味しいね！」

「美味しい食事にはおいしいお米が基本」との病院長からの助言で、米の食味会を行い、球磨盆地特有の寒暖差で生産された、粒張・粒揃いが良く、美味しい米に変更しました。すると年間を通して主食の味が一定して、沢山の患者さんから「ご飯が本当に美味しい」と評価を頂き、美味しい食事にはおいしいお米が必要である事を痛感しました。米の価格は少し上昇しましたが、直営給食で管理栄養士が野菜・生鮮食品を15日間ずつ見取りを取り、適正価格で納入したので食費はそれほど変化しませんでした。献立・発注業務を行う事は、栄養管理と食事管理についての専門性を高め、若い管理栄養士の育成に繋がると考えられます。

「治療食でも満足されています」

少ない人員で効率的に業務を行うために、まず栄養管理委員会での約束食事箋の見直しにより、食種数を減らし、平成31年度の院内の情報システム変更時に、全献立を作り直しました。常食と治療食の献立が異なると、治療食の患者さんから不満の声があるので、常食と治療食を同じ献立にして、素材の種類や調理方法でエネルギーや塩分量を調整しました。このことで食事オーダーの簡素化（医師業務削減）し、献立統一で患者さんの「治療食は質素だ」という声が聞かれなくなりました。作業面では下準備の時間短縮が出来ました。

「働きやすい環境作りに努めています」

調理員と一緒に朝礼・会議・勉強会・業務係を行う事で連携を高めました。調理員の高齢化で生ごみ・残菜廃棄が重く負担になっているため、生ごみをバイオ生分解して処理する機械を購入する事で、力のない調理員の作業効率アップと、環境に優しくSDGsの取り組みにもなりました。食事の衛生面確認のため、毎月、検査部に酸性水pHと食事の生菌数検査を実施、医療安全委員会と共に「5S活動」に取り組んでいます。職場環境を見直すなど他部署の協力を得る事で、衛生面で気をつける事が明確になり、自分達では気付かなかった業務ラインの配置、調理服のリニューアルが出来ました。

これらの事から、令和2年度の患者満足度調査の食事関係の項目で満足度が上昇し嬉しく思います。



おいしいお米が基本



栄養管理室スタッフ

JCHO 仙台病院 総務企画課 総務企画課長（併）医事課長 三浦 雅之

当院は、1952年（昭和27年）に仙台市青葉区堤町で迎光園健康保険仙台療養所として始まり、1969年（昭和44年）に前身の仙台社会保険病院、そしてJCHO仙台病院へと名前こそ変わりましたが、約70年にわたり北仙台地域の拠点病院として診療にあたってきました。

しかしながら、建物・設備の老朽化及び狭隘化に伴い、患者さんへのサービスが十分に出来なくなったこと、東日本大震災で第2病棟が甚大な被害を受けた事、仙台市北部地域での医療需要が高まっていること等から、堤町から北に10kmほど離れた閑静な住宅地「泉パークタウン紫山」へ移転する事となりました。泉パークタウンは、西に仙台市のシンボル泉ヶ岳や遠く蔵王連峰を望み、四季折々の景観が楽しめ、また、隣接する仙台泉プレミアムアウトレットの欧風で煌びやかな雰囲気もある落ち着いた街並みが特徴です。その街並みの中でも、仙台病院の重厚な白鷺の建造物がひと際存在感をアピールしております。

新病院は2019年4月に着工、開発工事の影響で約7か月遅れながらも、2021年2月19日竣工、2021年5月1日に無事開院となりました。延床面積3万2492㎡、高層棟は免震構造7階建、低層棟は耐震構造3階建、2階建エネルギーセンター棟と院内保育所を有しております。病床数384床、20の診療科と日本仙腸関節・腰痛センター、腎臓疾患臨床研究センターをはじめとする6つの医療研究センターを構え、救急医療体制の更なる充実、健診事業拡大と幅広い地域医療ニーズに対応できる総合

病院として、仙台市北部医療圏の中核となり、“地域とともにどこまでも高みを目指そう”を合言葉にスタートしました。さらに移転を機に、休診していた小児科も専門医3名体制で再開され、地域からの期待も高まる一方です。

また、当院は2011年の東日本大震災において、自院の建物も一部損壊し、150床が使用不可になったにも関わらず、震災被害を受けた37の医療施設に代わり、透析患者を受け続け、24時間フル稼働し、震災翌日から7日間で1,759人の人工透析を行ったという経験があります。医師・看護師をはじめとする職員のチームワークの良さが当院の強みであり、ワンチームで何事にも前向きに進んでいく気概があります。

仙台市に、まん延防止等重点措置が発令される中での患者移送、移転後もコロナ病床を確保しつつ、徹底した感染予防対策をしながらの新病院開院となりました。院長曰く、“迎光園仙台療養所として結核療養所でスタートし、新型コロナウイルス感染症で幕を下ろした旧病棟はその時代の何かを感じる”と。

新境地では、村上院長が掲げる「地域医療で一番大事なのは親切な対応。JCHO仙台病院が地域の安心を生み出す灯台になる」「地域の人々から頼られ、地域が誇りとする病院を目指す」をスローガンに、職員一丸となって邁進する所存でございます。JCHO本部をはじめ、北海道東北地区管理部、JCHOグループ病院の皆様方には、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



新病院写真全景



地元、東北楽天イーグルスをはじめ、43の団体から御花をいただきました



東西 97.5 m に及ぶ
外来ホスピタルストリート



解放感のある吹き抜けのエントランスホール



63床から76床に増床した血液浄化センター

第6回 JCHO 地域医療総合医学会の開催に向けて

一般社団法人地域医療機能推進学会 事業課 ファン 歩実

『第6回 JCHO 地域医療総合医学会』は、2021年10月8日(金)・9日(土)のグランドプリンスホテル新高輪・国際館パミールでの開催に向け、木村 健二郎会長(JCHO 東京高輪病院院長)のもと、プログラム委員会における協議や開催準備委員会の先生方のご支援を戴きつつ、現在、準備作業を鋭意進めております。

今回のメインテーマは「不撓不屈」です。新型コロナウイルス感染症は、日常生活や経済活動を一変させ、医療にも甚大な影響を与えています。そのような厳しい状況においても、強い精神力をもって力強く立ち上がらなければならない、という木村会長の強い思いがテーマに込められています。学会ホームページに「会長挨拶」を掲載しておりますので、ぜひご覧ください。

プログラムの企画構成では、特別講演に杉山 愛さん(スポーツコメンテーター・元プロテニスプレーヤー)をお招きし、ご講演いただきます。新型コロナウイルスに関するセッションでは、新型コロナウイルス感染症対策分科会会長を努めている、当学会の尾身 茂理事長や、東京都の新型コロナウイルス感染症医療アドバイザーの大曲 貴夫先生にご講演をお願いしました。例年開催しております「継続テーマシンポジウム」や「シンポジウム」でも多数の外部講師をお招きします。地区事務所、部会による企画セッションも行います。また、新たに教育講演も行うこととし、より魅力的なプログラムを企画しております。

今後の感染状況により開催方式の変更を余儀なくされる場合もありますが、JCHOに勤務する職員の皆さまが、一年に一度、意見を交換する貴重な機会ですので、行政や関係機関の感染防止ガイドラインに基づき、徹底した感染対策を講じた上で、従来通りの現地開催を目指し、引き続き準備を進めてまいりますので、よろしくお願い申し上げます。

開催概要につきましては、学会ホームページにて随時公表してまいりますので、ご確認くださいませようお願い申し上げます。<http://www.jchs.or.jp/jcho2021/>



第6回 JCHO 地域医療総合医学会 主なプログラムと講師

(敬称略)

- 会長講演 「不撓不屈」 木村 健二郎 (JCHO 東京高輪病院 院長)
- 特別講演 杉山 愛 (スポーツコメンテーター・元プロテニスプレーヤー)
- 会長企画シンポジウム 「新型コロナウイルス感染症の現場から～不撓不屈」
特別発言 大曲 貴夫 (国立国際医療研究センター病院 国際感染症センター センター長)
- 理事長講演 「感染症と私(仮)」 尾身 茂 (地域医療機能推進学会 理事長)
- 教育講演
「新型コロナウイルス肺炎～地域の病院における診療の実際～」
大曲 貴夫 (国立国際医療研究センター病院 国際感染症センター センター長)
「頑張った職員に桜咲く」
内野 直樹 (JCHO 理事)
- 継続テーマシンポジウム
「特定行為研修を修了した看護師の効果的な活用と展望～チーム医療とタスクシェアの実現～」
神野 正博 (社会医療法人財団董仙会・恵寿総合病院理事長 / 公益社団法人全日本病院協会 副会長)
中島 由美子 (医療法人恒貴会 訪問看護ステーション愛美園 所長)
「JCHO における ICT の活用」
松本 純一 (聖マリアンナ医科大学 救急医学 講師 / 合同会社 modorado)
「事務職に求められるマネジメント～どのような仕事のやり方が期待されているか～」
- シンポジウム
「医療安全を施設の第一歩とするために～ JCHO のこれからを考える」
相馬 孝博 (千葉大学病院・副病院長・医療安全管理部長・特任教授)
矢野 真 (日本赤十字社医療事業推進本部・総括副本部長)
「民間企業の最先端事例から学びたい職場づくりのコミュニケーションの作法」
荒金 久美 (株式会社コーサー 理事) / 荻野 博夫 (スターバックスコーヒージャパン株式会社 人事・管理統括オフィサー)
三浦 康久 (日清食品株式会社 経営管理室次長)

※プログラムは変更する場合がありますのでご了承ください。

